

新年度は 特別展「椎名誠」でスタート

2022年度展示 秋は「山内ジョージ展」



椎名誠 桜園にて

今年度の展示では、旅の軌跡をたどりながら、旅で手に入れた品々や自身が撮影した写真などを通して、椎名作品のファンがいます。

今回の展示では、旅の軌跡をたどりながら、旅で手に入れた品々や自身が撮影した写真などを通して、椎名作品のファンがいます。

今年度の展示では、旅の軌跡をたどりながら、旅で手に入れた品々や自身が撮影した写真などを通して、椎名作品のファンがいます。

今年度の展示では、旅の軌跡をたどりながら、旅で手に入れた品々や自身が撮影した写真などを通して、椎名作品のファンがいます。

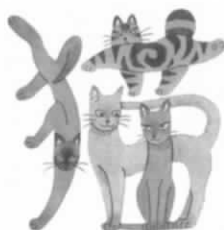
今年度の展示では、旅の軌跡をたどりながら、旅で手に入れた品々や自身が撮影した写真などを通して、椎名作品のファンがいます。

今年度の展示では、旅の軌跡をたどりながら、旅で手に入れた品々や自身が撮影した写真などを通して、椎名作品のファンがいます。

2022年の春は、特別展「椎名誠」旅する文学館in仙台で始まります。椎名さんは、1979年にエッセイ集「さらば国分寺書店のオババ」でデビューして以来、40年以上にわたり約300冊にのぼる著書を世に送り出してきました。なかでも「旅」をテーマにした作品群は

の魅力と旅の醍醐味をお伝えします。

夏休みにも文学館は、いかがしみます。おさんの「忍べんまん丸」展を開催します。かわいいペンギンがひよんなことから忍びになるという異色のストーリーで、これも大人も楽しめるドタバタ冒険譚です。展示では、漫画原稿やテレビアニメ版のセル画などを展示する予定です。



© 山内ジョージ

文学の杜

仙台文学館友の会会報

第68号

令和4年3月20日発行

仙台文学館友の会(仙台文学館内)

〒981-0902

仙台市青葉区北根2丁目7の1

電話 022(271)3020

仙台文学館のホームページ

https://www.sendai-lit.jp/

変化する街、揺れ動く日常に右往左往するこの時代、足元にある日々の暮らしを、ふだん着の仙台の街の記憶をたどることで見つめ直します。

講座やイベントでは「佐伯一麦エッセイ講座」や「佐伯一麦北根ダイアログ2022」を予定しています。また「仙台文学館ゼミナール」では、童話作家 新美南吉の作品世界を読み解く講座を新たに開催します。「ことばの祭典」は昨年引き続き事前応募の形で、ぜひ会心の作を「投稿ください。カフェ「ひざしの杜」では、今年も展示にちなんだスイーツを提供予定です。この不自由な状況の収束を願いつつ、皆さまのご来館を職員一同お待ち申し上げます。(学芸室長 渡部直子)

仙台文学館2022年度展示予定

◆特別展「椎名誠 旅する文学館in仙台」
4月23日(出)〜6月26日(日)

◆夏休みにも文学館えほんのひろば「忍べんまん丸」展
7月16日(出)〜9月11日(日)

◆特別展「山内ジョージ 文学館展」
10月1日(出)〜12月11日(日)

◆新春ロビー展「100万人の年賀状展」
1月11日(休)〜2月12日(日)

◆写真展「仙台コレクション」
1月21日(出)〜3月21日(火・祝)

*タイトル、会期は予定です

私と郷土と文学 ⑲

四年。生まれてから今日まで仙台以外で過ごした時間だ。だから私の体は仙台の空気で出来ていると言ってもいい。しかし最近まで、故郷や郷土という言葉と自分を結びつけることが出来なかった。縛り付ける土地と感じ、根を下ろすことに抗っていたのだ。だから宮城、仙台に縁のある文学と言われても、それを好き嫌い、読む読まないの基準にすることはなかった。

近ごろ故郷、郷土という言葉への認識が変化してきた。郷土とは縛り付ける土地ではなく、人との出会い、繋がりがから生まれ築かれていく感覚だと思ふようになった。震災が影響しているのかもしれない。

お知らせ

第43号から書き継がれてきた「私と郷土と文学」は、今回を最終回とします。これまでご投稿くださった皆さまに感謝いたします。

編集委員は、投稿しやすいコーナーとは、と考え続けています。そこで「私と郷土と文学」を閉じ、次号から「私と文学」として再スタートすることにしました。お薦めの本、原作と映画など、少し間口を広げて、投稿をお待ちしています。

〈新コーナー投稿募集〉

「私と文学」

約600字で会員の皆さまの投稿を募集します。文学館友の会事務局まで、お送りください。

仙台っ子だけど

ない。でも、まだ震災文学を読む心の準備は整っていない。一方で、そろそろ気持ちは整理をするためにも、手に取らなければとも思う。それは義務感からではない。文学館での様々な出会いが、郷土ゆかりの作家について教えてくれた。その作家たちの作品だからだ。郷土への抵抗は止めて素直に本に向き合っ、出会った人達が教えてくれた素晴らしさを共感したい。そんな気持ちが湧いてきた。コロナで閉じこもりがちなのは、読書が解放してくれるに違いない。あれつ、もしかすると私の郷土は読書なのかな。この思いつきはちよつと嬉しい。何より読書は楽しいのだから。(長沼和子)

文友の部屋

「僕達、もっと早く知り合えば良かったね」恋愛もので、こんなセリフよく聞きますよね。私は偶然に立ち寄った市民センターで「文学の杜」に出会いました。定年後、あらゆる刊行物に投稿しています。毎日何かを書いていると気持ちが落ち着くのです。「文学の杜」にもっと早く出会えば良かった。何か私と「文学の杜」を引き合わせたと思っています。(阪本昭恵)

「文友の部屋」の原稿募集

1500字程度で、会員のみなさまの声をお寄せください。おススメの文芸作品や、映画・演劇などを見た感想などジャンルは問いません。イニシャルでの投稿も可です。

風と歩こう ⑰



Photo by Ryuji Sasaki

昼下がりに、文学館からの帰り足。ゆるやかにカーブを描く坂道をテクテクと下り、途中で立ち止まってひと呼吸、何気なく前方を眺めてあつと思つた。びつしりと住宅が建ち並んだ向かい側の傾斜地が目に入ったからである。陽を受けて明るい家々は、現実のものであるはずなのに、なぜか舞台の書割(背景画)を見ているような不思議な感じがした。自分が今歩いている緑深い場所との明らかな相違が驚きを大きくしている。こんな風景が目の前にあることになぜ今まで気付かなかったのだろう。

谷のように落ち込んだ県道を挟んで、あちら側には日常の持つざわめき、こちら側には深く濃い静けさ、という全く対照的な景色がある。文学館の坂道は動と静の対比を感じ取ることの出来る場所だった。

やがて車の行き交う県道に出てバスに乗り、あの傾斜地の家々に明かりの灯る夜の姿を思い描いてみる。同じ夜、あちら側から見る文学館は深閑とした森に包まれているのだろう。(佐)

編集後記

仙台文学館友の会会報「文学の杜」第68号をお届けします。

▽どんと祭の前日、お正月の下げ物をもって西公園の桜岡大宮宮に行った。初詣でもある。帰りは地下鉄東西線に乗り、仙台駅を通過して国分寺駅まで足を延ばした。聖武天皇の国分寺に何故に伊達家の薬師寺がという疑問が解ける。資料館入り口には文学館玄関と同じ松飾が風に揺られていた。(一)

▽「アンネの日記」に関してのニュースがあった。調査研究の結果、謎だった隠れ家を密告した人物が特定されたということ。隠れ家のあった建物の関係者で、自身の家族を守るために抗いきれなかったのでは、と伝えられた。もうすぐ終戦という時期にアウシュヴィッツに送られた十五歳で死んだアンネ、誰が密告したか謎だったからこそ、当時の世相の底知れぬ不気味さが感じられたのに、と聞きながら少しがっかりしていた。(近)

▽朝食の片付けが終わって、コーヒーに手を伸ばすと、視線の一番外を何かがスリットと横切る。ほぼ毎日同じ時間、トビがビル谷間の周囲を回すのだ。時にはカラスを追いかけ、時にはゆっくりと孤独に優雅に飛行する。彼の飛行が日常の風景の一つになってしまった。姿を見なかった日は、つい何度も窓の方を見つめまう。(和)

▽読書の範囲を広げたいと思ひ、今年1月から月に1、2冊は日本の古典を読むことにした。まず古事記から取りかかったが、神々の生み出す子の多さに、読んでもチンプンカンプンである。今は徒然草、枕草子、方丈記などを心静かに読み、遙かな時代の人々のこまやかな感覚と博識に驚かされている。(佐)

文友一滴

「星野富弘美術館が開館されます」星野さんの作品展覧会が仙台で開催されたときに聞いて以来30年も過ぎた。新幹線に乗り小山で乗り換え、両毛線で桐生まで。そこでわたらせ渓谷鉄道に乗って神戸で降り、バスで美術館に着いた。遠い！住所は群馬県桐生市東村草木。それだけで自然に「この深山だ」ということがわかる。ここが星野さんの生まれ育ったところなのだ。外形は長方形の建物だが中は円形の連続であり、主会場から他の部屋には廊下なしで行くことができる。周囲の景色も本当に素晴らしい。けがをして四肢が不自由になり、筆をくわえて作品にしてきた草花と詩の世界は生きる喜びがじんじんと伝わってくる。詩文集の中にこんな場面があった。(ペストレットチャイ)に寝たままでお花見をしていた時、桜の花を手向けられて思わずしゃぶりついてしまった(た)には、情景が見えて涙があふれて仕方がなかった。その時の桜の絵もしっかり見えた。

両毛線では「思川」の駅看板にみえる。小池光歌集「思川の岸辺」に、安らぎを覚える川だと記していたのはこの川だったのか。誰か名付けたのだろうか。降りてみたい気になったが車窓からだけにした。他方わたらせ渓谷鉄道で降りた駅は「こうごう」駅看板には「神戸」の文字が見えた。わけわからずにあわてて降りた。コウベとかカンベとしか読んでこなかったからだ。

美術館、住所、駅、川も家から一歩足を踏み出して知りえないことである。興味と関心がうすくない限りは歩いたり本の世界に入り込んで面白がりた。死生学のデーケン先生も老いと死の妙薬といっているではないか。私流に解釈をすれば知ることが楽しい。それこそ老いの妙薬と理解しているのだ。(一)

友の会随想

野草園の小父さんこと寺田利和は私の父方の親戚である。千葉県佐倉市郊外の農家に生まれ早大の社会学部を卒業後、大正十五年河北新報社に入った。以後故郷に帰ったことは無い。仙台的野草園と何か係わりがあるらしいと云う



野草園の小父さん

会員 多田 緑

伝説の人だった。あれは昭和四十年の終わり頃と記憶している。父の栄仙がそのきつかけとなったのだ。向山からの急な坂を息を切らせて上った雑木林の中に思いもかけなかった粗末な家があった。寄せ集めの板やトタンでこわれた小屋、それが小父の住居だった。偶然、時は秋の真盛りで、櫻、公孫樹、楓等の落葉がはなやかに家の中迄降りそそぎ、穏やかな風が市街地の方

から吹き上って、さわやか。鳥の声に交って遠くから入園者の賑わいの音、子供の歓声がきこえて来るではないか。土間に草花の鉢が沢山。小父と静江さん、オウムのパロちゃんを迎えてくれた。お茶を戴きながら、ふと、この家はいつかやめる庵、俗な世を退いた人が住む処の庵に違いない。野草園であれば特に草や木が織りなす風景がこわされてはならないし人間の生活臭も厳禁だ。又敗戦後の日本人の物に拘る生き方に組み込まない小父の一途な信念の強さにも圧倒されて、帰り坂は何度もふり返り気持ちをひき締めたと等も覚えている。

それ以降小父は紫陽花や山百合が咲くと我が家に届けてくれた。作業衣姿で寡黙ながら鋭い眼光が記者としての面影を留めていた。しわくちなや笑顔の小父は何となく父の様な懐かしさを感じる人でもあった。小父の辞職の経緯は「河北新報の百年」に詳しい。仙台空襲で被災し敗戦直前に軍の激怒をかって自ら辞職した小父に力強い援助の手がさしのべられた。一力社長と伊達家の方々

に变身するには手助けが必要」という女の言葉は意外だった。彼は、女の滞在する高級ホテルでチェロのレッスンを受けることになる。毎日の感想と指示に従ってひたすら曲を弾き続けることで、確かに自分の音楽が深みを増していると実感できるのだった。やがて女は、演奏をしないチェリストという自分の特別な才能について語り始める。「全体が音楽に満ちた作品」「音楽の癒しを感じる」などの感想があり、音楽が人間の心の動きをさり気なく表現している作品なのだと思います。ふたりの出会いが結実するのかもしれない。才能とはなにか。作品のテーマはなにか。「あなたはどう思いますか」といくつもの問い掛けが作者から読者へと手渡され、それが読後の余韻となって残る。チェーホフに影響を受けたというノーベル賞作家の柔らかなで不思議な短編である。

2月9日、5名参加。

(佐)

第50回読書会

有り得ない物語の中に居る 江戸川乱歩「人間椅子」

若く美しい作家の佳子は書齋で、座り心地の良いなめし皮の肘掛け椅子を愛用している。ある朝、佳子は自分宛ての郵便物の中に一束の小説原稿を見つけた。タイトルの無いその作品は、「奥様」という書き出しで始まっており、異常であるゆえに作家佳子の好奇心をそそった。貧しく醜いと自らを説明する椅子職人

の男は、椅子を作り続ける中で、自分の作る豪華な椅子に座る人のことを想像するようになる。それはやがて妄想となつて次第に膨らみ、ついに彼は思いがけない行動に出ることになる。参加者の誰もが「有り得ない事だが、やはり気味が悪い」と読後感を述べ、「なんの楽しみも持たない変態人間の話」と一蹴する人も居た。犯人を捜しつつ読むミステリーと違い、気楽に読めたとの感想は共通のようだ。数年前日本で現実にあった、犯人が楽器箱に隠れて海外逃亡するという、意表を突くあの事件を思い浮かべた人もいて、笑った。

12月8日、5名参加。

(佐)

第51回読書会

問いかける、才能の不穏 カズオ・イシグロ 「チェリスト」

舞台はイタリ ア。アドリア海に面した広場のカフェで、チェリストのティポールは彼の演奏を聴いたという年上の女から声をかけられる。音楽学院に学び、その後有名な指導者にも師事し、すでに演奏活動をしていた彼にとって、「あなたには可能性がある。さなぎから蝶

次回読書会は4月13日(水)14時 チェーホフ「いいなづけ」(新潮文庫)「かわいい女・犬を連れた奥さん」(所収) ※友の会会員は自由に参加できます。申込みは友の会事務局まで。



二年間実現できなかった「友の会講座」を、2月18日に開催した。感染防止対策のため、講習室での解説、展示の見学は自由、質問は個別にという形で行われた。受講者は14名、解説は仙台文学館学芸員の庄司潤子さんが担当した。

常設展の展示内容の変化の歴史を導入部として、平成31年4月に加えられたコーナー「II震災と表現」あの日、以前。あの日、以後。についての解説だった。文学館として震災とどう向き合うか、展示の方法など、すべてが取り扱いの難しい繊細な課題だったこと。そして、なぜ「震災と文学」ではなく「震災と表現」というコーナーになったのかを聞き、受講者は各自の「あの日」を思い出していた。

友の会講座

「常設展示解説」を受講して

感染予防対策のために、前後の間隔を広めに取った机一脚に一人、互い違いに着席して開講を待つ。空間の広さを感じる講習室、窓の外は雪を残した庭、午後の陽の光だけが春を予感させる。庄司学芸員の解説が始まると、講習室の空気が一変した。友の会行事を待ち望



文学館の個性にふれる

友の会講座「常設展示解説」開催

んでいた参加者の気持ちと、解説者の伝えたい気持ちが融合し、空間が徐々に熱を帯びる。渡辺会長の「できれば資料を見ないで……」で始まった朗読は、会場全体を包み込んでいった。「震災と表現」コーナーの担当者である庄司学芸員の解説には「仙台ゆかりの表現者たち」への深い共感が満ちていた。文学館という箱に入ったプレゼントを受け取ったような気持ちになった。

「常設展を暫く見ていなかった。展示内容が大きく変わっているのに驚いた。またゆっくり見たいと思った。常設展への関心を深める良い機会になった。」 展示室中央の広いテーブルには仙台ゆかりの作家の本が並べられている。「こんなにゆかりの作家がいるんだ。」(この作家のおもしろく読んだ) 展示物を見ながら話が弾み、近づいているのに気付いて一歩さがす。そんな光景が見られた。

解説の後「あの日」を思い出しながら展示室に向かった。展示の前に立つと、受講者がそれぞれの感想を話し出した。「小説家だけでなく、幅広い分野の文学者についてのお話があったよかった。」(朗読があった、とてもよかった。)

「常設展を暫く見ていなかった。展示内容が大きく変わっているのに驚いた。またゆっくり見たいと思った。常設展への関心を深める良い機会になった。」 展示室中央の広いテーブルには仙台ゆかりの作家の本が並べられている。「こんなにゆかりの作家がいるんだ。」(この作家のおもしろく読んだ) 展示物を見ながら話が弾み、近づいているのに気付いて一歩さがす。そんな光景が見られた。

100万人の年賀状展終了

20回の節目となった今年の年賀状展には、国内の14府県から735通が届いた。文学館の1階エントランスロビーは、新年を祝う手書きの年賀状で、ちいさな花が咲いているようだった。毎年届く中学校生徒の年賀状は、その数も多く内容も多彩である。中学生らしい澆刺さが新年を迎えるにふさわしく、見ているこちらまでうれしくなる。繊細なイラストもあり、今の若者の能力を知らされる思いがした。赤い下駄の絵を添えた99歳の方からの賀状は、胸にずしりとよろこびが響く。ちゃんと生きなさいよと諭されるようだ。クロスステッチで作られた賀状には、手仕事の温かさが縫い込んであった。絵手紙グループの人たちの絵に添えられた短い文は生き生きと。ディスプレイに通う人たちは活動の中で描かれたのだろうか。職場体験で文学館を訪れた中学生の作品もあった。文学館にゆかりの文芸者の賀状は1枚1枚に趣があり、人柄がしのばれる。この展示が始まった20年前から現在までの年表が添えられており、ああ、こんなこともあったとしみじみ時代を追うこともあった。この展示は文学館と友の会の共催事業です。来年はぜひあなたの賀状をお届けください。(佐)

